vol.15

日本農業遺産認定

丹波篠山の黒大豆栽培・300年の歴史

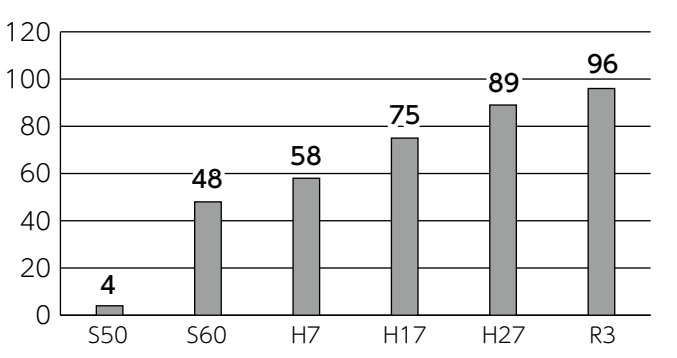
黒大豆「“独自”の栽培あれこれ」

丹波篠山“独自”の生産組合方式

昭和50年代、食生活の多様化により米が余るようになると、国の減反政策（米の生産調整）を受けて米以外の作物に転換する必要が出てきました。多くの市町村が新たな作物の選定に苦労する中で、丹波篠山では、これまで主に畔（あぜ）で植えられていた黒大豆「丹波黒」を栽培することにしました。

しかし、本格的に栽培するとなると、防除や脱粒などに新たな機械が必要です。また、黒大豆は「苦労豆（くろうまめ）」と呼ばれるほど、多くの手間と労力を要します。これらの問題を解決するため、各集落単位で機械や施設を共同で利用したり、作業をみんなで助け合う生産組合が設立されたりしました。この取り組みにより、小さな規模から大きな規模まで、全ての農家で高品質な黒大豆が安定的に栽培されるようになり、今日の産地づくりにつながっています。

丹波篠山市は、兵庫県下でも有数の生産組合数を誇ります。生産組合が畝（うね）立てから収穫、選別に至るまで、生産のほぼ全体に携わる事例は他の黒大豆産地にはあまりなく、丹波篠山が生み出した“独自の方式”と言っても過言ではありません。



生産組合数（丹波篠山市）

生産組合による脱粒作業